15例，女5例）で午前9時～10時に空腹安静にて採血した．rapid ACTH test, ACTH-Z 3日間筋注法には第1製薬社製コートロシンおよびコートロシンZを使用した．

（結果および考察） 既に報告したごとく（臨床病理学会総会，1980年）抗体濃度は1:8000(最終希釈濃度)を用いた．incubation timeは検討の上24時間を採用した．抗体濃度を1:1600に濃縮すると感度は明らかに悪くなった．測定感度は50 pg/m*l*～5000 pg/m*l*の範囲であり intra assay variation および inter assay variation の C.V. はそれぞれ5.6%, 12%であった．ヒト血漿中β-Endorphin濃度は，β-4PHの交叉性がある50%を測定値から差し引いて108±4 pg/m*l* (Mean±S.D.) となり Wilkes (JCEM 50: 309, 1980) らの成績と一致した．血漿/血清比は3.5±0.4であった．メトピロン3g/day投与により前値の160%に上昇した．一方ACTH-Z 3日筋注法により前値の75%にまで低下した．Dexamethasone投与に対して，中井らは ACTH とともに β-Endorphin が抑制されたとしているが Kalin (Science 209: 827, 1980) らは β-Endorphin は抑制されないと報告している．われわれは ACTH-Z 投与により内因性ステロイドホルモンの上昇による β-Endorphin の抑制を報告した．

## 10. Radioimmunoassay による血中 free thyroxine の測定

松村　要　中川　毅　田口　光雄
（三重大・放）
信田　憲行　（同・中放）

Damon 社製 Liqui Sol free thyroxine RIA test system を試用する機会を得たので，その成績を報告する．本キットの特徴は $^{125}$I-thyroxine を結合した thyroxine 抗体が封入されたマイクロカプセルが用いられていることである．

インキュベーション時間が長くなるほど標準曲線の勾配は急峻となったが，同時に測定した3種類の pool 血清の測定値に有意差は見られなかった．pool 血清をホルモンフリー血清にて希釈した結果，希釈曲線は概ね直線となったが，全般にやや underestimate される傾向が見られ，その理由として希釈に用いたホルモンフリー血清の TBG 濃度が検体の不飽和 TBG 濃度より高いためと考えた．検体量の変化は測定値に大きな影響を与えず，このことは質量作用の法則にしたがって free $T_4$ が測定されていることを支持する．3種類の pool 血清についてトリプリケートにて4回異なるアッセーを行い，精度 CV 10%以下，再現性 CV 14%以下と，ほぼ満足される結果を得た．正常者14人の平均値および標準偏差は1.69±0.38 ng/d*l*，甲状腺機能亢進症および低下症は正常域と重なりなくよく分離された．平衡透析法による free $T_4$ 測定値との間には良好な相関関係が見られた．(r=0.97) free $T_4$ 値と free $T_4$ index は概ね良い相関を示すが，後者は高値領域にて free $T_4$ 値より低値を示し，また悪性腫瘍例等に正常より低値となるものがあり，free $T_4$ 測定が有益と考えられた．

## 11. 亜急性甲状腺炎様の臨床経過を呈した慢性甲状腺炎の2症例

松田　博史　道岸　隆敏　中嶋　憲一
大口　学　小泉　潔　桑島　章
分校　久志　前田　敏男　利波　紀久
久田　欣一　（金大・核）

われわれは最近，発熱などの全身症状とともに発病し，甲状腺局所の腫脹，自然痛，圧痛など明瞭な炎症症状を示し亜急性甲状腺炎様の臨床経過を示した2症例を経験した．両症例とも甲状腺の腫脹と圧痛を訴え，検査所見上も赤沈の異常な促進，CRP の陽性化，血清甲状腺ホルモン値の高値，$^{131}$I 摂取率が0に近い値を示すなど亜急性甲状腺炎の特徴とされる所見を呈した．両者の鑑別には，慢性甲状腺炎亜急性型では，亜急性甲状腺炎に比して，甲状腺腫が大きく，また炎症所見の治癒した時期においても縮少はするが特有な甲状腺腫が存続すること，比較的短期間に再発をくり返すことがあること，検査所見ではサイロイドテストやマイクロゾームテストが強陽性を示すものが多いことなどが役立つと思われる．しかし最終的診断は組織所見によらなければならないと思われる．

Presented by Medical*Online